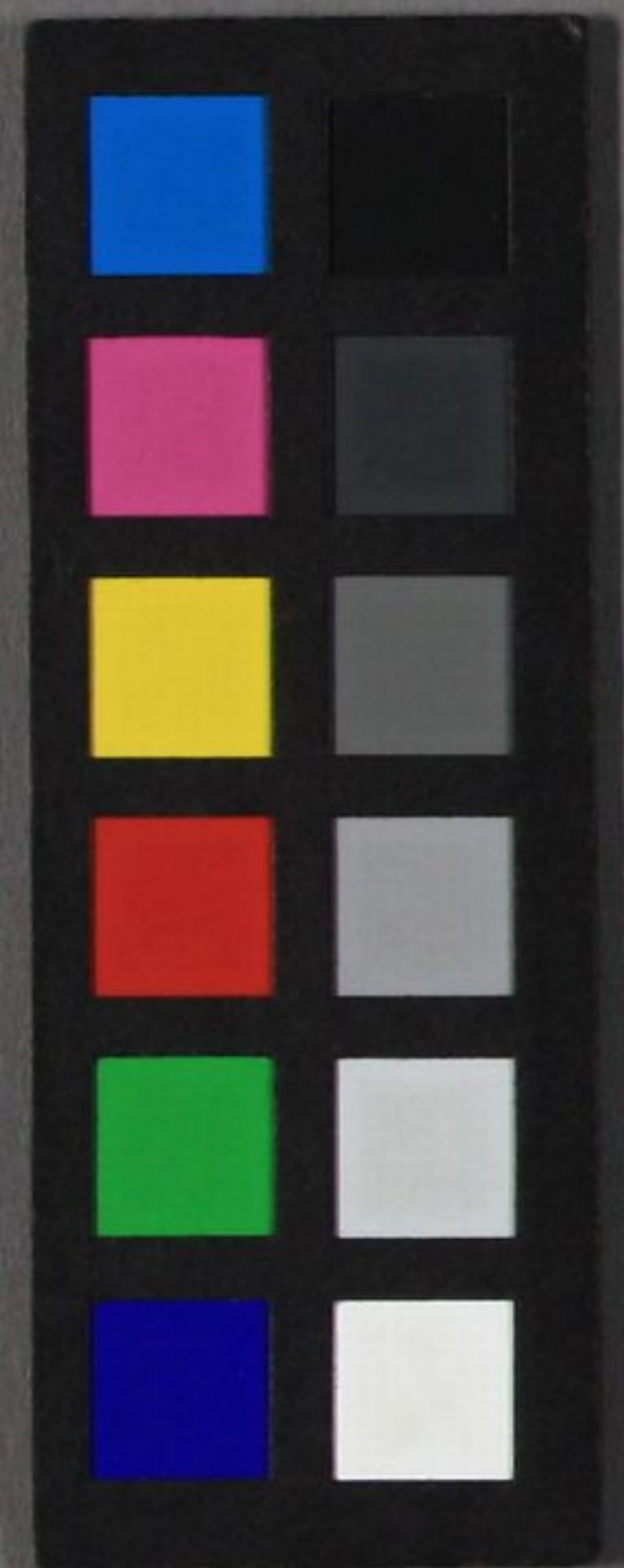
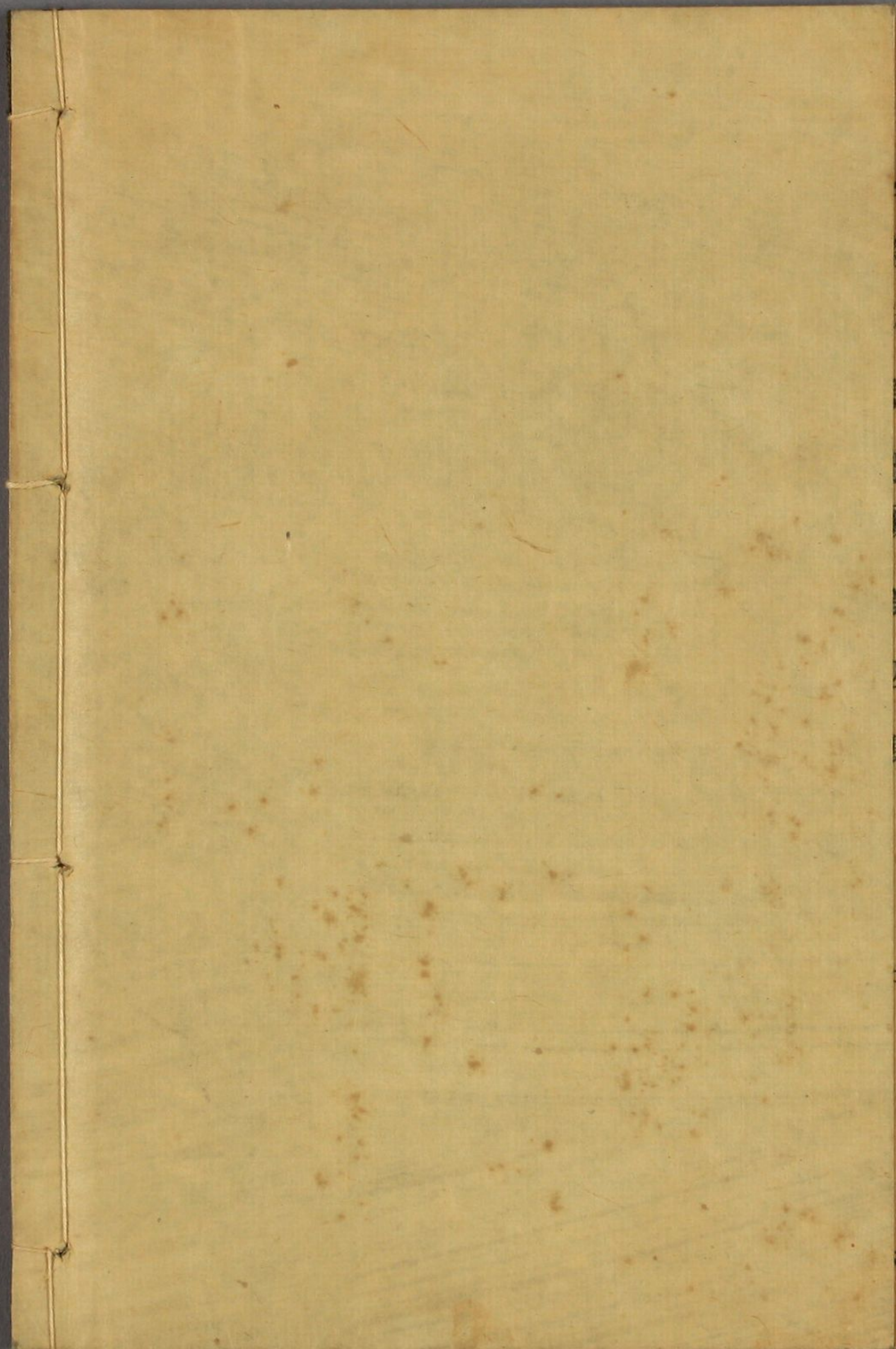


翻 刻

新
体
詩
歌

竹
内
隆
信
編
輯
第
四
集





新体詩歌第四集序

余嶰谷竹内氏ト始メテ湘川ノ滸リニ相逢フ同居スル數月
タリ一度袂ヲ別ツテヨリ爰ニ三年復ヒ東都愛宕ノ麓ニ邂
逅シ手ヲ握リ膝ヲ交ヘ相語り相問フ事數刻タリ氏其編ス
ル處ノ詩歌第四集ヲ以テ余ニ示シ且語テ曰ク凡ソ人喜怒
哀樂ノ感情慷慨悲憤ノ氣焰苟モ其腦裏ニ充溢スル者ハ或
ハ是ヲ詩篇ニ漏ラシ或ハ是ヲ歌章ニ詠シ以テ能ク人心ヲ
鼓舞シ又能乾坤ヲ感動セシムル者古今其例少ナシトセス
然レモ今我國ノ風俗ヲ見ルニ詩歌ハ殆ント操觚者流ノ玩
物ノ如ク文人墨客ノ一遊戲ノ如ク然リ其之ヲ爲ス者モ亦
徒ニ月ニ吟シ花ニ咏シ殊更ニ奇語ヲ綴リテ雅致ト稱シ人
事ヲ離ル、ヲ以テ快樂トナス又嘆ナラスヤ又遺憾ナラス

ヤ今此編ノ如キ其語ハ俗其調ハ易故ニ牧童モ以テ誦スヘ
ク機婦モ以テ讀ミ易カルヘキナリ然リ而又其喜怒哀樂ノ
情ヲ詠シ慷慨悲憤ノ氣焰ヲ漏ス事ハ彼ノ章々文ヲ成シ句
々調ヲナス漢詩和歌ニ讓ラサルナリト余卷ヲ開キ默讀ス
ル數章乃チ鈍筆ヲ咄リ其語ヲ録シ以テ贊成ノ意ヲ表ス

明治十六年林鐘下浣

在東都斗墨

柳

田

識

新体詩歌第四集

目次

- 虞禮氏墳上感懷の詩
- 小楠公を詠するの詩
- 代悲白頭翁歌
- 寒村夜歸
- 西詩和譯
- 詠史
- 吊忠魂歌
- 以上七篇

新体詩歌第四集

竹内 節 編纂
坂部 貫 校閱

我邦ニ於テハ西洋ノ詩歌ヲ翻譯スル人甚タ少ナシ蓋シ
其趣向ノ我詩歌ト同シカラサルカ爲メナルヘシ又適翻
譯スル人アルモ之ヲ支那流ノ詩ニ模擬スルカ故ニ初學
ノ輩ハ解スル事能ハス余之ヲ慨スル久シ以爲ク西洋人
ハ其學術極ノテ巧ミニシテ精粗到ラサル所ナシ其詩歌
ニ於テモ亦之ト均シク能ク景色ヲ模寫シ人情ヲ穿テ讀
賞ス可キモノ多シ且ツ其句法萬種ニシテ韻ヲ踏ムモノ
アリ踏マサルモノアリ緩漫ナルモノアリ疾急ナルモノ
アリ其語勢ノ變化殆ント捉摸ス可カラス而シテ其言語

ハ皆ナ平常用フル所ノモノヲ以テシ敢テ他國ノ語ヲ借
ラス又千年モ前ニ用ヒシ古語ヲ援カス故ニ三尺ノ童子
ト雖モ苟クモ其國語ヲ知ルモノハ詩歌ヲ解スルヲ得ヘ
シ加之西洋人ハ短キ詩歌ヲ好マサルニハ非サレトモ亦
長篇ヲ尙ヒ尋常ノ日本書ノ如キ薄キ冊子ヲ以テスレハ
一篇ニシテ十餘冊ニモ上ルモノ少ナシトセス頃口學友
某々氏ト相謀リ吾人日常ノ語ヲ用ヒ少シク取捨シテ試
ニ西詩ヲ譯出セリ余素ヨリ詞藻ニ乏シト雖モ既ニ譯シ
得ル所數篇ニ至ルヲ以テ今其一ヲ舉ケテ江湖諸彦ノ高
覽ニ供ス幸ニ其詞藻ノ野鄙ナルヲ笑フナカレ

尙 今 居 士

○虞禮氏墳上感懷の詩

山々かすみいりあいの	鐘はなりつゝ野の牛は
徐に歩み歸り行く	耕へす人もうちつかれ
やうやく去りて余ひとり	たそがれ時に残りけり
四方を望めは夕暮の	景色はいとゞ物寂し
唯この時に聞ゆるは	飛ひ來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやにつく	羊の鈴の鳴る響
猶其外に常春藤しけき	塔にやとれるふくろふの
近よる人をすかし見て	我巢に寇をなすものと
訴へんとや月に鳴く	いとあはれにも聲すなり

かしこには楡又こゝに あらゝきの木を生茂る
其下かけにうつたかく 苦むす土の覆ひたる
擴に埋まれこの村の 古人長く打眠る

軒の燕も 鶏も 木魂に響く 角笛も
あさはらけにそなりぬれば かまびすしくはありつれど
冥土の人の眠をば 覺すことこそなかりけれ

死にたる人の果敢なさよ 身を暖むる 爐火も
妻のよなへもたか爲めそ 愛るわらへかたことに
爺の歸りをよろこひて 小膝にすかる事もなし

曾てこの世に居し時は 麥も小麥も 其鎌に
山も畑も 其鋤に 手荒き馬も 其鞭に
繁れる森も 其斧に 任せて君か儘なりき

功名とても 浮雲の 過るか如きものなれば
この古人の世の益と 骨折するも 不運をも
わひしき妻子の暮らしをも 笑ふへきにはあらずかし

富貴門閥のみならず じめ美しくしき乙女子も
浮世の榮利多けれど いつか無常の風吹かは
草葉の露もおろかなり 黄泉に入るの外そなき

昔に埋れし古人は	墓場の上に寺を建て
あまりまはゆき屋の内に	頌歌の聲に合すなる
樂器の音を聞すとも	身の不徳とな思ひそよ
ひつき肖像美を盡し	人の尊敬多くとも
ひとたひ絶えし玉の緒を	つなき留むへき術はなし
諂らふ人のほめ言も	長き眠は覺すまし
考へみれは癡れたる	此古墳の古人も
世にすくれたる量ありて	國を治むる徳を具し
詩文の才も多けれと	あらはれすして失せける歟

學ひの海は廣けれと	渡る船路を知らされは
心の性は賢こきも	身は賤しくて貧なれは
世の譽れをは聞すして	空しく鄙に終りけり
深き水底求むれば	輝く珠も有そかじ
高き峯をは尋ぬれば	馨る本草の多け〇と
千代の八千代の昔しより	人に知られで過きにけり
實に此墓に埋もれて	業はおどるもハムデンに
詩は拙くもミルトンに	國に軍を擧すとも
クロムエルに比ぶべき	人の屍やあるならん

議院の議士を服さしめ	人のおどしも外に見る
國の安危を身に委ね	高き譽望を民に得る
此等の業はおしなべて	古人何ぞあづからん
恵みは廣く及はねど	又常々のふるまひに
不徳もいとど少なしや	人を殺して王となり
民をなやめて利をあみす	夢にも見まじ去ることは
誠をかくすその言に	耻るを忍ぶ心の苦
且つ巧みなる詩文もて	富貴に媚る世の習
是は都の弊なれど	未だ此地に及ぼさず

此所に生れて此所に死に	都の春を知らされば
其身は淨き蓮の花	思ひは清める秋の月
實に厭ふべき世の塵の	心に染みし事そなき
されど收めしなきからの	記るこの爲と側近く
建し石碑は今もあり	文は拙く彫りざまは
醜しとてもたび人の	憐を争て惹かざらん
碑面にえられる名に年齢に	記しゝ文字は拙くも
記念の功は有そかし	又有かたき經文の
文句を引きてゑりたるは	人に無常を諭す爲め

蓋し此世に生れ來て 程なく死する其時に
 別れの惜しき事もなく 浮世の花の榮えをは
 心の外に打捨て 去り行く人はなかるべし
 眼の光り止むときは 戀しかるらん身のやから
 魂しひ体を去る時は 痛く慕はん妻子とも
 たどひ焼くとも埋むとも 人の思ひは消えはせじ
 偕 又 此に 古人の いはれは書けど余とても
 いつか歸らぬ旅に立ち 過ぎ行く後は世の人の
 如何せしやと思ひやり 尋ぬる事も有ならん

しからん時は此先の 頭に霜を重ねたる
 老人斯くぞ曰ふならん 我儕は彼れが朝早く
 昇る旭を見はやとて 岡に登るを常に見き
 又 彼處なる川端の 枝伸び垂れし山毛櫨の木
 わだかまりたる根の側に 身を横たへて晝いこひ
 流るゝ水に打臨み 其常なきをかこちこん
 又 彼處なる常葉木の 木立の下にさまよひて
 頭ら 傾け腕を組み 知る人なさの歎かしき
 とどかぬ戀の口惜しさ 世のうさ杯をかこちけん

去るにひと日は彼の人を 慣れし岡にも樹陰にも
絶て見る事なかりけり 其翌朝になりぬれど
野にも森にも川邊にも 身をは現はす事そなき

又其次の朝ぼらけ しかばね送る歌きけば
まさしく彼れの爲なりき 君は字を知る人なれば
彼の山櫃かぶの陰にある 碑文を讀みて識り給へ

碑文

土に枕しこの下に 身をかくしたる若人は
富貴名利もまた知らず 學ひの道も暗けれど

哀れ 此世を打捨て あの時の人となりけり

仁惠深き人なれば 天も憫み報いけり
憂き人見れば涙ぐみ (外に詮すべなき故に)
獨りの友の有しとよ (外に望みはなかるらん)

是より外に此人の 善し悪し共になほ深く
尋るとても詮はなし たましひ既に天に歸し
後の望みをいだきつゝ 神にまぢかく侍るなり

○小楠公を詠するの詩

嗚呼正成よ正成よ 公の逝去のこのかたは

黒雲四方にふさかりて 日月も爲に光りなく
悪魔は天下を横行し 下を虐げ 上をさへ

あなごり果てゝ上とせず 吹き来る風はなまぐさく
絶ゆる間のなき人馬の音 春は來れども花咲かず
芳野の山に花見むと 訪ひ來る人は絶へてなく

君が御代こそ千代々々と 囀る鳥の聲聞は
いづれの時にあるなるや なげかはしきの至りなり
嗚呼大君の御爲に 振ひ起りてけがれたる

この世の塵を洗はむと する人としてはあらざるか

遠くあなたを見わたせば 金剛山は巍峨として
雲の上まで屹立し 繁る林の木の間より

見ゆる菊水の其旗は 實にこそ國のたからなり
父の賜ひし此刀 腹をきれとの爲ならず
賊の頭らを斬らせむ爲 にくさもにくし彼の賊等

國の仇なり父の讐 斬りて捨てずに置くべきや
拂へば來たる夏の蠅 頃は正平戊子の春
熟ら思ひめぐらせば 元來よはき此からだ
若しも病に冒されて 空しく失せし事ならば

不忠不孝と誹しられむ 討死するは此時ぞ
 死出のなごりに今一度 願ひかなひて親面たり
 君の御影を伏し拜み 生て飯れのみことのり
 聞て切なる胸のうち 哀れといふも愚かなり
 書き残したる梓弓 引きてかへらぬ赤心を
 誓ひし者は百餘人 雲霞の如き大軍を
 ものともせず斬まくり 君の方をば枕して
 討死せしはいさぎよく いさましかりける事共なり
 都も遠き村里の 女わらべに至るまで

忠臣孝子の鑑ぞと 譽る其名は香しく
 天地と共に傳はらん 天地と共につたはらん

○代悲白頭翁歌

大竹美鳥

都の錦桃櫻 花の色香の日にそへて
 うつろいて行く乙女子が 散り行く花を打眺め
 露の命の果敢なさを かこつもいと哀れなり
 暮れ行く春に花散りて 木々の梢は緑りしぬ
 眺め見あかぬ我心 又來ん春を思ひやる
 花は今年に變らねど 身の行末ぞ忍ばるゝ

常葉の松も 杣人が 斧にふるれば 忽ちに
 賤が伏家の 薪なり 桑の畠も 年ふりて
 青海原に なりきてふ 事さへ人の 云ふそかし
 過にし 春の曙に 花見し人ぞ 今はなき
 今もては やす諸人は 行衛も 知らぬ花の風
 風を 怨みて 中々に 身のふり 行くを思はざり
 春毎に 咲桃櫻 色も 同しく 香も 同し
 今年も 去年に 變らねど 變るは 人の 姿なり
 今年は 去年より ふりにたり 又來ん 春は 如何ならん

如何に わくらは 言告ん 我も 昔しは 汝が 如き
 花の 顔月の 眉 今は 頭に 霜おきて
 哀れ翁に なりに たり 哀れ 汝も 亦心 せよ
 いとけ なかりし 其日には 木の 下影に うちむれて
 戯れ 遊ふ 舞の 袖 風に 散行く 花の色
 光り 輝く 高樓に 天津 乙女の 歌ひして
 樂しく 暮す 月と 日の 流れを 早き 飛鳥 川
 昨日の 淵を 今日 みれば 瀬に 變り ゆく 我姿
 病の 床に ふし 柴の 戸ほそ を 叩く 人そなき

花の顔 月の眉 うつろいてゆく世の習
 緑の髪を今日見れば 越の國なる白山の
 頭は白く青柳の 腰は梓の弓なれや
 過にし事を今更に 思ひ出れば中々に
 千々に物こそ悲しけれ 入相告る鐘の聲
 時に歸る村雀 實に常なきは世の習

○寒村夜歸

小川健次郎

草木も眠る 丑三を なれし道とて只ひとり
 遠寺の鐘の音 凄く 小笹を渡る夜嵐の

我を襲へる 九折つら 登るも暗き杉村を
 洩來る月の片われは 何地なりけん梟の
 聲より外に友もなし かゝる淋しき土地なれど
 住めば都の鬧がしき 車の塵もかゝらねば
 權貴の門にへつらひて 名利に追はれ牛馬に
 まけぬ重荷を負ひ擔かつき 我と我身に使はると
 苦痛はしらで春の花 夏は螢や郭公
 秋は鹿の音 月雪と 四時おり／＼の景物を
 我もの顔にもてあそぶ 身は昭代の棄材そと
 自らゆるし友も亦 瓢一ツに王公や

貴人も知らぬ快樂の　多き此身を神に謝し
謳へは返す谷の山彦

○西詩和譯

大竹美鳥

此詩原ブレットハートノ作ニシテ僅々三章一百字妙味
蓋シ言外ニアリ今之ヲ譯ス譯語ノ拙ナルヲ以テ原詩ヲ
推ス事勿レ

暴風あらしに雨を吹きまかせて　いとすさまじき聲すなり
海面うなづらさこそと思はるれ　岸うつ波の音高き
今日は漁業休ならん　嗚呼畏ろしき聲斗り

右一章

獸の踪を尋ねんは　いとく難し今日空
岩間に吼る獅子もあれ　谷間に嘯く虎もあれ
今日は山獵休みなん　嗚呼畏ろしき聲り斗

右二章

海に幸ある舟子ども　山に幸ある獵男ども
市に歸ればこは如何に　さきの地震に家つふれ
此所も彼所も怪我人の　嗚呼畏ろしき聲斗り

右三章

○詠史

武士の石すえとしもたゞへつゝ。其の名かれせぬ楠の木の
やまと心のくもりなく。君につかへて國のため。あかさか山

にたてこもり。あるは千早に吹をろす。おろしの風にかたき
らは。たまりもあいすちりくど。散行きけりとかの本の。い
やつきしにうちよせて。又引かへし攻め來れば。今を限りに
死なはやと。心極めて櫻井の。里にかほれる言の葉を。子に教
つゝ殘し置。其身はやかてつはものを。うちしたかへて湊川。
そこをふかみて赤心に。謀りし事もあわとなり。消えて戰の
敗れると。豫てかくそと空に滿つ。倭心は三吉野の。花と散て
し憐れさを。早くも仇の傳へ聞き。暫時しまとろむ夢をさへ
驚かなんとむらきもの。心をつきて君が爲。盡す心はたゆみ
なく。家に傳へしみとらしの。梓の弓のなきかすに。いるてふ
事を記るし置。吉野の山にかほれるも。實にたくひなき丈夫
の。親子はらからの。こらすも。國を枕になしてける。赤き心を

今も世に。傳へ聞くだに身もさふく。なりにけるかも適はれ
ますらを

反歌

古しへをさしくまれけり湊川世に流れぬる名を慕ひつゝ
世を経つゝ朽せぬ名こそ楠の石となりぬる記しなりけれ

元治のはじめの年都に事ありしより此かた公のおほ
ん爲に命うしなひし人々の祭り行ふとて讀める

○吊忠魂歌

從三位 毛利 元徳

かくなへて過にしかたの年よめは十あまりみつのそのか
みの。空にあやしき雲おこり。大内山を立こめて。光りさやけ
さ天つ日をおほひ曇らしごこやみと。なせるを歎き我いへ

に。つかへし人ら赤心に。おもひはかりて。もどかしは。もどこの。と。くに九重の雲井の空をさやかに。拂ひてしかと言たて。うち出しものを其ことのならずてついにその人も都の野へのしら露と消にけりかも。その身はしきへ果ぬれとほどもなく其人とものはかりつる。事の如くにいにしへに。大まつりことかへりつる。もどをたどりてあはれく。此人ともの大君のおほみためそと玉きはる命捨にしるたちより。なれりともへは己れらが。かく明らけき大御代の。みいつくしみにあふこと。この人とも。この國のため。のこし置つるいさをしと千歳ののちにかたりつがまし

反歌

雲晴てさやけくなれる天つるをあはきもあへす失し人は

もあた波をかへしもやらくいたすらに屍ねみつきし人そ
悲しき
新体詩歌第四集 畢

新
傳
言
哥
集

明治十七年四月廿三日
翻刻御届
同 年五月出版

(定價金八錢)

編輯兼
原版本主

和歌山縣平民
竹內隆信

翻刻人

山梨縣平民
內藤傳右衛門
西山梨郡常盤町四番地